

研究委員会企画チュートリアルセミナー

学級で研究しようとする人のための心理学研究法入門

— 研究デザインの視点とデータ収集上の注意 —

企画者・講演者 岡 隆 (日本大学文理学部)
仲 真紀子 (北海道大学大学院文学研究科)
企画者・司会者 平 井 洋子 (首都大学東京都市教養学部)

企画の概要

1. 趣旨

心理学研究法は、実験的なアプローチを取る人だけでなく、記述的なアプローチや統計的なアプローチを取る人にとっても役に立つ重要な知識である。なぜなら心理学研究法は、研究においてどのような変数を設定すべきか、どのような場面やタイミング、方法でデータ(質的情報も含む)を得るかなど、研究を予めデザインする視点と枠組みを提供してくれるからである。そのような視点は、質的研究・量的研究を問わず、研究の質を高めてくれるであろう。

教育心理学の諸領域において、学級で観察や調査、実践が行われることは多い。そうした研究状況を心理学研究法の視点から眺めると、どのような研究デザイン上の弱点や注意点が浮かんでくるのであろうか。本チュートリアルでは、これらの点について、具体的な例を交えながら入門的な解説を行いたい。

2. 想定する対象者

学級を研究フィールドとして、量的データや質的データを収集しようとしている研究者や教員。横断的研究か縦断的研究かは問わない。教室でどのようなデータの取り方をすると自分の考えを実証的に検討でき、どのようなデータの取り方をするとそれができないのかについて知りたいと考えている人。

3. セミナーの構成

第1部：基礎知識編

より妥当な因果推論を行うために知っておきたい事項を中心に、基礎的な知識を整理する。

第2部：応用編

研究をデザインする過程を中心に、具体的な研究場面への適用について紹介する。

第1部：基礎知識編

岡 隆

心理学的研究は、その一つひとつが具体的な実践であ

る。第1部では、その実践を可能にするために必要な基礎的知識を、高野・岡(2004)と岡(2006b)に基づいて、特に実験的なアプローチを想定しながら解説する。

1. 手続き化、補助仮説

多くの研究はリサーチ・クエスチョンを発することから始まるが、心理学的研究のリサーチ・クエスチョンの多くは、2つ以上の変数間の関係に関するものである。2つ以上の、しかし少数の変数間の関係——因果関係にせよ相関関係にせよ——が明確に述べられたものを、研究仮説という。

研究仮説に含まれる変数は、おおよそ抽象的で概念的なものである。この変数について、何らかの事実を同定するための実証的な研究を行うときには、この抽象的な変数を具体的な手続きに対応させなければならない。この対応づけを手続き化ないしは操作化といい、このようにして概念的変数と具体的手続きの対応づけが明確に述べられたものを、補助仮説という。多くの研究者に採用される標準的な手続き化が用意されている——補助仮説が比較的確立している——研究領域もあるが、そうでない研究領域では、個々の研究者がその手続き化に創意工夫を凝らさなければならない。

一つの実証的研究には、このように最少でも3つの仮説——研究仮説と、2つの変数それぞれの補助仮説——が含まれることになる。実証的研究のデータが研究仮説を支持するときには、研究仮説が正しかったと、とりあえず結論することができるが、それが研究仮説を支持しないときには、研究仮説が正しくなかったとは結論できない。補助仮説のいずれか、あるいは両方が適切でなかったという可能性があるからである。実証的研究のこのような性質のために、補助仮説が確立していない研究領域——心理学的研究では多くの領域がそうであるが——では、「不存在の実証」や「反証」は極めて困難である。

2. 純化、多重意味と多重手続き化

概念的変数と具体的手続きは、1対1ではなく、多対多に対応している。1つの概念的変数はいくつもの具体的手続きに翻訳することができるし、逆に、1つの具体的手続きはいくつもの概念的変数の代表でありうる。この後者を、「手続きの多重意味」という。このような事

情の中で、しかし、実際の手続き化に際しては、1つの具体的な手続きが、その研究が扱おうとしている概念的変数それだけの忠実な代表になるように工夫しなければならない。この工夫を純化という。純化を達成するためには、研究者が意図しない夾雑物が手続きの中に紛れ込んで、その結果として多重意味をもたらしているようなときには、その夾雑物を取り除くように手続きを洗練することができる。しかし、このような技術的な水準の問題ではなく、もっと根本的な意味での「手続きの多重意味」の問題を解決して、完全な純化を達成するためには操作主義 (Bridgman, 1927/1960) によらざるを得ないが、心理学の中では、具体的な直接的変数のみを扱い操作主義を利用できるような研究領域は極めて限られている。

手続きの完全な純化が困難なときに、抽象的な変数の確からしさ——構成概念妥当性——を保証していく手段は、多重手続き化である同一の概念的変数を代表していると考えられる複数の手続きを利用する方法である。これは、1つの実証的研究の中に複数の手続きを組み込むことによって、あるいは、別の実証的研究として概念的追試を行うことによって実現できる。多重手続きが同じ事実を発見するときには、それらの多重手続きが共有しない意味——概念的変数——を排除できる範囲で、その研究が扱おうとしている目的の概念的変数の確からしさが保証されることになる。

3. 第3の変数

心理学的研究は、おおよそ2つ以上の変数間の関係——因果関係にせよ相関関係にせよ——を検討するものである。実証的研究を実施して、2つの変数間に関係(例えば、データ上、有意な得点差や相関係数、回帰係数などが得られること)が発見できたとしても、その関係が本当の関係であるかどうかは疑問である。別の第3の変数が、その2つの変数間に見せかけの関係をつくり出しているに過ぎないかもしれない。この第3の変数は、剰余変数ないし共変数など様々な呼ばれるが、第3の変数が研究に混入しないように統制——第3の変数の排除ないしは一定化——しなければならない。個体差変数や個体内変動の統制は、実験計画法によって比較的機械的に実現できるが、その研究に固有の第3の変数は、先行研究に基づく専門的知識と常識を総動員した創造的な思考によって直接的に統制しなければならない。

理想的な研究計画が策定できたとしても、しかし、学級という現場では様々な制約のために、その計画をそのまま実行に移すことができない場合が少なくない。それでも、そのような場合にも、できるだけ第3の変数の可能性を排除していく、様々な工夫がなされなければならない。例えば、理想的な実験が不可能で、準実験に頼ら

ざるを得ないときがある。準実験には、無作為配置を行わないケース、横断的比較を行うケース、縦断的比較を行うケースなど、それぞれのケースについて第3の変数の混入を防ぐ、ないしは、仮に混入していたとしたらその混入の事実を事後的に査定するための方法が開発されている。第3のケースでは、例えば、時系列中断計画や不等価従属変数の考え方の利用である。

4. 研究状況の人間性、社会性

心理学的研究は、おおよそ、研究者という人間が、研究参加者という人間に対して研究を実施するものである。研究の現場では、研究者という役割の人間と参加者という役割の人間が、それぞれの思いを持ち込み、そして相互作用する。そこには、意識的にも非意識的にも、様々なバイアスが持ち込まれ、様々な対人影響がお互いに実行され、研究者が本来意図しなかった結果が生じることがある。

このようなバイアスは、研究状況の人工性の問題として批判されている。しかし、研究という行為にとって人工性は不可避のものであり、その人工性が致命的な問題になる場合とならない場合がある。実証的な研究が研究現場での現実の生活の人工的な再構成であったとしても、生態学的妥当性が十分に配慮されていれば、とりあえずはその人工性は致命的な問題として批判されるにはあたらない。しかし、研究者の十分な配慮がなければ致命的な問題となりうる人工性としては、その典型的な例として、要求特性や社会的望ましさなどの観察反応(反応性)、研究者の期待効果、自己報告式内観法などがこれまでリストされてきた(岡, 2003)。これらの問題に対処するための様々な技術的工夫がなされている。

研究という状況では、研究者(実験者、観察者など)と参加者(被験者、回答者など)との社会的相互作用が営まれている。研究者は参加者に対して特殊な社会的認知を行い、それに基づくコミュニケーション行動をとる。参加者は研究者に対して特殊な社会的認知を行い、それに基づくコミュニケーション行動をとる。研究者と参加者のそれぞれの特殊性が、研究者と参加者間でのコミュニケーションに齟齬や障害をもたらして、思わぬ方法論上の致命的な問題を招来することがある。岡(2006a)は、このような問題について具体的に議論し、その解決の方向性を示唆しようとしている。

第2部：応用編

仲 真紀子

研究の道筋は、(i)関係性を調べるに値する概念XとYを同定する；(ii)概念X, Yに(一意に)対応する変数 x , y を決定する(構成概念妥当性)；(iii)変数 x と y の関係性を調査